小学英語授業 弾力的に

次期指導要領解説書 改憲手続き、領土詳述

文部科学省は21日、2020年度以降に実施される小中学校の次期学習指導要領の解説書を公表した。小学5、6年で初めて教科となる英語では、授業時間確保のため短時間授業や夏休み、週末を使った授業など弾力的な指導の重要性を明記。社会では中学校で憲法改正の具体的な手続きに初めて触れ、小中で領土の指導も詳述した。小学校では自衛隊の役割に「国の平和と安全を守る」と記載した。

解説書は児童生徒に教え導や教科書作成の指針となる。

主な学習指導要領解説書の内容

英語	活字体を学び、簡単な表現でやりとりする能力を付ける。短時間授業などで時間確保を（小学校）
社会	立憲主義や法の支配の考え方に立って憲法が制定され、憲法改正手続きも法律で定めている（中学公民）
	自衛隊はわが国の平和と安全を守ることを任務（小学校）
	竹島や北方領土、尖閣諸島はわが国の固有の領土。日本政府の立場は歴史的にも国際法上も正当（小学校）

中学校社会では、選挙権年齢が18歳以上となったことを踏まえ「主体的に政治に参加することについて自覚を深めること」を掲げた。公民分野では、立憲主義や法の支配の考え方に立って憲法が制定され、憲法改正のための国民投票の具体的な手続きも法律で定めていることを明記。

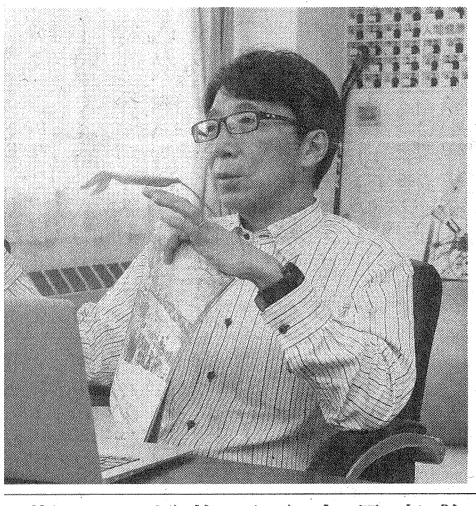
小中学校の社会の指導要領で、北方領土に加え、初めて竹島（島根県）と尖閣諸島（沖縄県）が「固有の領土」とされたことを受け、「わが国の固有の領土であることに触れて説明することが大切」とし、日本政府の立場が「歴史的にも国際法上も正当」とした。

憲法改正に関して、自治体や消防、警察と並び自衛隊を挙げ「わが国の平和と安全を守ることを任務とする」と説明した。

次期指導要領では、学習全般にわたり「主体的・対話的で深い学び」を掲げているが、学校現場ではどう授業をすればいいのかが不明確との声も強い。解説書では「これまでと全く異なる指導方法を導入する必要はない」と説明。授業単位ではなく単元ごとに学習を振り返り、グループで対話する場面を設定することなどを求めた。

館、グラウンド新設

構想 25年青森国体までに



総合体育館建設などの整備構想を明らかにする大谷直樹学長＝21日、八戸学院大

構想では、体育館とグラウンドは大学キャンパスの敷地内に整備する予定。体育館は、2025年に青森県で開催予定の国民体育大会までに建設する方針で、八戸市がメイン会場になるバスケットボール競技を実施可能な施設にしたい考えだ。

このほか、「生涯学習センター（仮称）」を市中心街に整備する案も明かした。これらは理事会で承認

私見創見 Thursday

心と言葉

子どもは疲れない！

畑山　篤
志学塾塾長

はたやま・あつし
1960年、八戸市生まれ。明治学院大卒。志学塾を運営しながら、全国各地で講演。「勉強部活」を提唱、放課後学習支援などに関与する。全国学習塾協会理事。

人は何歳から「疲れた」と言い出すのか。子どもは「疲れた」を口にするものではない―というしつけがある。「子どもは疲れません」と言い切る大人がいれば、子は「疲れた」とは口にせず、はつらつと育つものだ。

しかし、最近の子どもたちに接していて、学校行事などの感想を尋ねると、まず「疲れた」という言葉を口にすることが多い。

先週の土曜日の中学生コースは、中総体初日にもかかわらず、試合に出た者も応援に回った者も、授業開始時に遅れず着席した。

私は、真っ赤に日焼けしたサッカー部の中1男子に、「初めての中総体はどうだった?」とねぎらいの声を掛けた。男子は渋面で「疲れました」と。「えっ、試合に出たの?」と聞くと、きっぱり「いいえ!」。「では、なぜ疲れたの?」と続けると、言葉もなく疲れ切った表情をした。あきれて「おい、何がつらいの?」と強い調子で聞いた。すると、か細い声で「外が暑くて…」と。

その日は、地理の近畿地方に悪戦苦闘している中2男子がいた。私は「まず、県名・地名を確認しよう」と白地図を示しながら答えさせた。男子は「紀伊、伊勢、志摩、三重、奈良、滋賀」と答え、突然ため息をついた。驚いて「どうした?」と聞くと、「次が長いので…」とつらそうな表情をした。「長い?」と問い返すと、「はい、4文字もあって、ちょっと…」。私は指を折りながら「わかやま」と発音すると、確かに4文字だった。

われわれ親の世代が子どもだった頃も、つらい勉強や厳しい部活で苦しい思いをし、心身ともに疲れ果てたことはあった。しかし、屋外がつらいというサッカー部員や、平仮名が2文字から4文字に増えることを壁に感じる中学生のように、簡単に弱音は吐けなかったと思う。

親の世代と「ゆとり教育世代」は、やはり異文化なのかもしれない。

さて、毎年、幾つかの学校から講演の依頼がある。「ゆとり教育世代」の子どものやる気を引き出してほしいという注文が多い。

講演では、小学校低学年の頃を振り返ってもらい、宿題をやってからおやつを食べたか、おやつを食べてから宿題をやったかで、その後の性格が決まる―という内容を織り込んで話すことが多い。

子どもは、小学校低学年では「できないこと」より「できること」が多い。だから、勉強は楽しみであり、おやつを食べてからでも宿題はすぐ済む。

しかし、学年が進むにつれ、宿題を先送りにする習慣の子は、100点が少なくなり、「できないことがつらい」「できるようになることが面倒くさい」と口にする性格になっていく。

子育ての中で、「できないこと」の〝やり直し〟を先送りして、「でも元気だから」「でも足が速いから」などと勉強以外の「できること」に親子で熱中したり、「無理をさせるのはかわいそうだから」「やってあげた方が早いから」と〝やり直し〟をさせる手間を省いたりしてしまったら、子はつまずきを乗り越える好機を失ってしまう。

人は、未熟な時代は、心をすぐ顔に表すものだ。「疲れた」「つらい」「面倒くさい」というマイナスの言葉を繰り返すことを認めるのも親、たしなめるのも親だ。

「子どもは疲れない!」というしつけは、やがて、疲れた、つらい、眠い、だるい、ゆったりしたいという思いを、別の言葉で言い換えができる子どもに育てていく。

親の強い思いが、毎日毎日、子どもの性格を修正しながら、善き思いに変え、善きことをする方向に変えていくものだ。